

資料

佐藤富五郎一等兵曹の遺書・戦場日記

仁平義明

The testamentary note and the war diary of Petty Officer First
Class Tomigoro Sato

NIHEI Yoshiaki

はじめに

第二次大戦の終戦間際、昭和20年4月26日、中部太平洋マーシャル諸島のウォッセ島で没した、佐藤富五郎海軍一等兵曹の遺書と戦場日記を紹介する。

日本の委任統治領であったマーシャル諸島では、昭和19年2月、米軍の攻撃によってクェゼリン環礁の島々の日本軍守備隊が“玉碎”した。同じ時期、ウォッセ環礁の島々も、富五郎日記にあるように、米軍航空機の長期にわたる攻撃を受け続け、食糧補給もなく孤立していった。その中で、佐藤一等兵曹が昭和19年8月1日から昭和20年4月25日、死の前日まで書き続け、最期まで携行していたノートの日記と手帳に書かれた遺書は、奇跡的に一人の戦友の手に渡り、戦後1年以上経って遺族のもとにもたらされた。

それから60年後、私は佐藤富五郎氏のご子息佐藤勉氏が運転するタクシーにたまたま乗車し、後に述べるいきさつから日記と手帳を託されることになった。

富五郎氏は、自ら手帳の最後に“ガ死ダ（餓死だ）食モノナシ”と記している。それにもかかわらず、死の前日まで冷静な判断を持って自分が戦場で経験したことを彼は克明に記し続けた。遺書には、家族へのこまやかな配慮がみられる。

日記は、一人の兵が第二次世界大戦末期の、いわば見捨てられた島で、どのように生き、軍の上層部からどのような情報を与えられ、どのように考え、どのように感じ、どのように死んでいったかを知らせる貴重な資料である。しかし、遺書のある手帳（縦12cm×横7cm、112ページ）も、日記が書かれたノート（15cm×10.5cm、56ページ）も、薄い鉛筆で漢字カタカナ混じりの小さな文字でびっしりと書かれているのに加えて、戦場という環境条件と長年の経過によって用紙が劣化している。そのため、通常の手段ではほとんど読み取れない。コピー方法を工夫し判読した戦場日記を、その一部ではあるが、若干の考察を加えて公表することにしたい。

佐藤富五郎一等兵曹の遺書

佐藤富五郎氏が残した戦場日記について説明する前に、手帳に残された遺書（昭和20年4月20日及び21日付）と、日記の最終ページに残された“之ガ遺書”と書かれた最後の言葉（4月25日付）を紹介する。なお、漢字の旧字体は新字体に改めたが、カナは旧仮名遣いのままにしてある。行替えは原文の通りにした。〈 〉内は当て字を書き換えたものである。

●死去前日昭和20年4月25日付の“之ガ遺書”と記した絶筆（日記最終ページ）

二十五日 全ク動ケズ苦シム
日記書ケナイ
之ガ遺書
昭和二十年四月
二十五日
最後カナ

●手帳に残された、昭和20年4月20日付の妻シズエさん宛遺書

之ノ手紙文ダケヨク見テクレ
後ノ日記ハ オ前ガ見テワカラナイ
僕ダケノ キオクニ書タノダ
今思ヘ付タ事書行見タ
二十年四月廿日 床ノ中

（注）これは横書き。「キオクニ書^{カイ}タノダ」の部分は丸く囲んであり、次のような記述が続いている。

●手帳の遺書（続きページ）

戦死シ(テ)モ カ落スナ オ前ガ シッカリセヌト
子供ハ只レ<誰>ガ育ツ 元気デ育テ、クレ
僕モ心棒<辛抱>シテ 少々ノタクワヘモアル
筈ダ 安心シテヤッテクレ

東京品川区南品川四丁目
四九七番地 日下光子様ニ
知ラセテクレ 戦死 御世話ニナッタ
厚ク御礼ヲ申シテ呉レ

仁 平 義 明

(注) 横書き。「戦死」は四角く囲んで強調してある。後に続く記述も名誉の戦死を意識して、病死はしたくないという気持ちがあらわれている。

●手帳の遺書(続きページ)

亘理アラハマ同年兵 戦死 爆単<弾>デ

十九年九月三十日午前八時頃ダ

(佐藤新造)

年39才。 僕ハ四十才 二十年四

月末カナ。 戦死ダ

病死ハ絶対

シナイゾ。

ガ死<餓死>ダ

食モノナシ

(注) 横書き。(佐藤新造)のカッコは、富五郎氏自身によるもの。戦友原田氏からの富五郎夫人宛の手紙にも“昭和19年8月以降の病死は戦死”であるとして、「戦死」ということが強調されている。戦死が名誉な時代だった。宮城県亘理郡の“アラハマ”(荒浜)は、富五郎氏の郷里の逢隈の近く。“佐藤新造”氏は、同郷の同年兵になる。昭和19年9月30日付の日記にも米軍機20機による爆撃と佐藤新造氏の戦死についての記述がある。死期が迫った昭和20年4月20日、現在の自分の身に比べて、7か月前の友人の戦死をあらためて想起している。

「ガ死ダ 食モノナシ」の部分は、斜めに書き足されている。「僕ハ四十才、二十年四月末カナ」という死の予測はその通りになった。冷静な判断をする人である。

●手帳の遺書（続きページ）

僕ノ分マデ子供ヲ可愛ガッテ
四人ノ子供ヲ育テテ呉レ
暮ハ ^{クラシ}東京ガ良イデセウト思フ
僕ハ分隊デモ最後マデ頑張ッタ

（注）横書き。「僕ハ分隊デモ最後マデ頑張ッタ」という通りに、分隊の中でも最後の方までがんばって生きたことになった。

●手帳の遺書（続きページ）

東京市ト統合ニナル時 電気局ニ
千〇〇円カ 位
1千3百円位 預カッタヨ
受取書ハ家ノ桐箱（ニ）有リ

忘レズ受取り子供ノ教育費ニ
二十年四月二十日
妻 シズエ

（注）死の5日前、4月20日付。横書き。出征したとき、富五郎氏は、東京市電気局勤務。金額は丸で囲んである。「預カッタヨ」は「預ケタヨ」だろうか。

●手帳の遺書（続きページ）（ここから縦書き）

コレヨリ家庭覧ニシテ有リ
マスカラ ヨク読ンデ下サイ
孝子、信子、勉、赤チャンモ。父親ニ儘ス
親孝行ハ皆ンナデ母親ニ孝行ヲ
シテ下サイ。父ノ分マデモ
ソシテ家内仲良ク 兄、弟、姉妹、

仁 平 義 明

仲良ククラシテ下サイ。

父ナキオマイタチモ何ニカニ不自由

デセウガ イタシ方ナシ 之モオ国ノ

タメダ。 元氣デホガラカニ

オイシイモノデモタベテクラシテ

下サイ

(注) この部分を含めて以下の「続き」はすべて縦書き。「コレヨリ家庭
覧ニシテ有り」、子どもたちにいつか見てほしいという願いで子ども宛に
書いてあるのだろう。“赤チャン”とある三女の方は、当時1歳。誕生の
予定は家族からの最終便の手紙(昭和18年11月)あるいは小包(同12月)
で知っていたのだろうが、富五郎氏は、“赤チャン”の名前も知らないま
ま家族の幸福を願い、没した。

●手帳の遺書(続きページ)

亘理ニアル田地ハ困ラナイ限り

スグウリハラッテハナラナイ

感情ヲ害スル 三年キ<忌>位後ノ

事デモヨロシイ 銀行ニ預ケル

ヨリモ 良イト思フカラダ

僕ノ墓所ハ金ノ余リカ、ラ

ナイ所ニ致シマセウ ナゼナラ

コレカラ金ノ入ルトコロハナイカラ

デス 亘理ニスルカ良ク考へ

ナサイ

妻シズエ殿

(注) 「ウリハラッテ」の部分、最初「賣」の字を書いて消して「ウ」に
変えてある。いずれ幼い子どもでも読めるようにと配慮してのことと考え

られる。

●手帳の遺書（続き；4月21日付ページ）

僕ナキ後ノ暮シハ
東京ニ居ルカ、舎田<田舎>ニ引上ゲ
ルカ 引上ゲテモシ方アルマイ
暮ラセタラ東京ニスルカ 最モ
暮ラスニ良イ道ヲエラビ
ナサイヨ。 二十年四月二十一日書ク
後七日デ〇<丸>二年ダネ 過テ見レバ早イモノ
戦況モ次第ニ良クナッテ来テ居ルノニ
無念。 僕ハ反対ニ沈ンデ行ク
セメテ カドヤノ天井デモタベタイ
クサレタタクアンデモ良ロシイ

（注）昭和20年4月21日付。島上陸は昭和18年4月28日だから、あと7日で丸2年になる計算。

天井を出す「カドヤ」という店はどこにあるのだろうか。天井にはしばしば漬物がつくので、次の部分の「タクアン」は天井からの連想だろう。

●手帳の遺書（続きページ）

一、良ク木葉、草ノ葉、砂ニカジリ
ツイテ今マデ頑張ッタガ残念ダ
手紙ノヤリ取モ十八年八月カラ
十一月頃マデダ 謹<僅>カナ期間デアッタ
四、五ヶ月食物デ送ッテホシカッタ
一度ダケ十二月頃小包付<着>イタ アリガトウ
（二十年四月書ク）

（注）昭和18年12月くらいまでは、日本本土からの荷物がとどいたこと

仁 平 義 明

がわかる。昭和19年1月末からは、マーシャル諸島も米軍の攻撃を受け孤立することになる。1年3カ月近くもの間「良ク木葉、草ノ葉、砂ニカジリツイテ今マデガンバッタ」ものである。

●手帳の遺書（続きページ）

一、家内五人デ撮ッタ写真ヤキマシシテ
親類ノ方ニ差シ上ゲルコト
一、僕ノ命日ニハ子供達ニ沢山御馳走スルコト
一、火ノ用心最モナスコト 火事等起コサナイコト
一、父ノ四十才簡イ保険満期ノモノーツ
アリマス。 オタノシミ
一、掛金モラクニナルデセウ
一、今度掛金モシナイ様ニ、ナゼナラ
収入ノ道モナクナルカラデス

（注）家族を大事にし、自分の死後の家族の暮らしを心配する富五郎氏の気持ちがあふれた遺書である。

公開の経緯

遺書が書かれた手帳と日記のノートが私の手に託されたいきさつを述べたい。

私は、平成22年3月31日まで東北大学文学研究科に勤務していた。専門は心理学である。平成17年7月17日（日曜）、研究室がある仙台市青葉区川内から仙台駅まで、無線でタクシーをお願いして乗車した。そのタクシー（稲荷タクシー）を運転していたのが佐藤富五郎一等兵曹の遺児、佐藤勉氏（当時64歳）だった。乗車した場所が文学研究科の玄関前であったことから、私を大学のおそらく文学関係者だと思った佐藤氏が思い切って長年の願いを私に話すことになった。佐藤勉氏は、長じてから富五郎氏

の残した手帳と日記を読もうとしたが、書かれた文字はきわめて小さく質がよくない鉛筆で旧字体漢字とカタカナ混じりになっていて、当て字等も多く、用紙も変色しているため内容が読み取れなかった。それでも長年、読みたい気持ちを持ち続けていた。そこで、だれかそれを読み取ってくれるような専門家はいるかという依頼である。

この依頼を受けて、私は手帳とノート（日記）を預かることになった。私は自分と双生児である兄仁平道明が同じ大学、同じ文学研究科の国文学講座の教授であったことから、兄に大学院生程度でアルバイトとして読み取って書き起こしてくれるような人間はいるか尋ねることとした。兄からの返答は、このノートや手帳は古文書というわけではなくて、たんに文字が小さすぎるのと極薄の鉛筆で書かれ紙質が劣化し読み取りにくいだけなので専門家が読み取るという問題ではない、ただし大学院生では戦時のことについての知識がないために内容がわからず判読も難しいだろう、いきさつからしてお前が自分でやるしかない、というものだった。

預かってから時間も経ち、そのままお返しするわけにもいかず、私自身戦後生まれで第二次世界大戦や軍隊について十分な知識もないけれど、読み取れるところを一部だけ読み取ることを佐藤氏に約束した。

その後、書き起こそうとしても、鉛筆書きで極小の文字は薄すぎる上に、ノートの日記は長い時間に劣化していて、ほとんど読み取れない。なるほど、佐藤勉氏が読めなかったはずである。そこで、コピー濃度とコントラストを調整しながら、十数通りのうちで最も読み取りやすくなる適切な濃度とコントラストを選び、ノートをコピーしていった。それでも、ノートの地色も黒くなり読み取りは困難であった。したがって、読み取りはじゅうぶんなものではない。

全体に目を通すと、手帳に「遺書」というべき記述があったので、まず、それを書き起こし、手帳とノートをご遺族にもたらした戦友の手紙をあらためて書き起こした。さらに日記の最初と最後の部分を読み取って書き起こしたものを加えて、とりあえず佐藤勉氏にお送りした。その一年後

仁 平 義 明

に、部分的にもう少し日記を書き起こしたものをお送りした。時間の余裕もないというのは言い訳にしかないが、すべてを書き起こすのはご容赦いただいた次第である。

佐藤勉氏は、平成18年12月6日から13日までの8日間、厚生労働省社会・援護局が組織したマーシャル諸島慰霊巡拝団の一員として同諸島を訪れ、佐藤富五郎氏が没したウォッセ島も訪れた。その際に、勉氏は仮設の祭壇に、富五郎氏の好物だった品々や家族の写真とともに、私を書き起こした「佐藤富五郎日記」を供えられた。

日記から読み取れたものは、制海権も制空権も米軍に奪われ、マーシャル諸島に取り残された兵士たちが、補給もないままにどのような生活をし、どのように生き、何に苦しみ、何を考え、そして死んでいったか、兵士の目からみた戦争とは何だったかがわかる貴重な情報だった。

手帳とノートは、戦地で富五郎氏とともに土になってもおかしくない状況だったのにもかかわらず、偶然に戦友の手に渡り、その一年半後にご遺族の手にもたらされた。この経緯は、後に紹介する、戦友原田氏の手紙を参照されたい。帰りを望んだ遺書と日記が、戻るべき地に戻ったとしか言いようがない。さらに、その手帳とノートは、これも偶然から私の手で60年後に判読され、書き起こされることになった。必死の思いで書かれたものが再びこの世に現われたがっていた、とも思える。

遺書と日記を、富五郎氏のご長男、勉氏の了解のもとに公開する次第である。

佐藤富五郎海軍一等兵曹の略歴と戦時背景

佐藤富五郎氏は、ご子息の勉氏によれば、宮城県亶理郡亶理町逢隈鹿島字吹田70-2番地に生まれ、第二次世界大戦中には、東京市電気局産業

報国会に勤務していた。それ以前には、大正15年1月10日に現役兵として横須賀海兵団に入団、昭和3年満期除隊。昭和17年に再び召集。昭和18年4月28日マーシャル諸島ウォッセ島に上陸した。ほぼ2年後、同島で終戦4か月前の昭和20年4月26日早朝、40歳で没する。長男勉氏によれば、最終階級は海軍一等兵曹（追陞の可能性も考えられる）。戦没時の家族は、妻シズエさん34歳、長女10歳、次女8歳、長男（勉氏）4歳、三女1歳の5人家族であった。

マーシャル諸島と同じ中部太平洋のギルバート諸島の日本軍は、昭和18年11月、アメリカ軍の攻撃を受け、守備隊が“玉砕”した。また翌昭和19年1月末にマーシャル諸島のクエゼリン環礁にあるルオット島、ナムル島、クエゼリン島が攻撃され、2月初めには守備の兵士が“玉砕”していた。3千人以上が守備についていたウォッセ環礁の島も、米軍の上陸はなかったものの、その頃から航空機による爆撃と艦砲射撃を受け死傷者が相次ぎ、食糧補給もなくなった。戦後に帰国した戦友から富五郎氏の遺族にあてた手紙には、終戦1年前の昭和19年8月には、すでに“餓死者が続出”とある。佐藤富五郎氏は、そのただ中の戦場を経験した。彼の日記には、米軍航空機の攻撃、日本軍の苦しい食糧自給の有り様と、それもままならなくなった状況がつぶさに記録されている。

遺書と戦場日記が日本にもたらされたいきさつ

一 戦友原田氏から遺族あての手紙

富五郎氏の遺書が書かれた手帳と日記のあるノートは、戦後1年以上経った昭和21年12月頃、戦友だった原田氏（同氏は、富五郎氏の日記では、“同年兵（原田・桜井）”、として登場する）から遺族のもとに送られた。原田氏からは以下のような手紙が別に送られた。ここには、富五郎氏の最期の様子と手帳とノートがもたらされた経緯が伝えられている。

原田氏の手紙の原文は縦書きの漢字ひらがな混じり文。漢字旧字体は、新字体に改めた。旧仮名づかいはそのままにしてある。句読点があると読みやすいと思われるところは一部補った。

なお、ウォッセ (Wotje) 島は、当時の表記。現在は、実際の発音にしたがってウォッチェ島、あるいはウォッジェ島と表記される。富五郎氏の日記でも、原田氏の手紙でもウォッチェ島と記されている。

前略御免下さい。

早速御一報下され誠にありがたく御礼申し上げます。本来なれば参上致してくわしく御話申上たいのですが現在の私には其れも出来ず誠に申訳ありません。乱筆ではありますが佐藤富五郎氏の御戦死の前後を大略申上げます(昭和十九年八月より以後の病死は戦死と申す)

思ひ返へせば昭和十八年四月廿八日に横須賀海兵団に入団、現地中部太平洋マーシャル群島ウオッチエ島に上陸、同じ部隊に入り、同年十一月十一日までは別に変ったお話もありません。十一月十一日に初めて空襲があり、同月十八日より毎日空襲があり警備の私達は必死の反撃を続け敵の上陸は防ぎましたが海上権を敵に取られそれより我が島は孤独におちいり、食料は日一日と無くなり十九年八月頃には餓死する者が続出する現象となりました。それより毎日我等兵隊が食料作りを始め空襲の間を見てはトウキビ又はコーリャン、カボチャ等を一生懸命に作りました。私と佐藤君は離島監理として本部より離れた小島に行き食料の増産にはげみました。佐藤君はエニヤ島、私はアグメジ島と離れては居りましたが時々接しては語り、内地へ帰れるのは同年兵では自分達二人位だろうな、原田等といつも内地のことばかり、内地へは可愛い妻子を残してあるんだものちょっと死ねないね等々何時も話す事は妻子の事ばかり、日本は必ず勝つよ、勝てば帰れる、其の日までお互ひにがんばらうぜ、佐藤君はあごひげをのびし、こんな顔を子供に見せたならびっくりするだろう等と一寸位のびたあごひげをなで乍ら笑ひ合った事も今は悲

しい思ひ出となりました。二十年三月中旬頃、本部隊より佐藤君本隊に帰る様命令が下りました。本部隊の兵がほとんど死に絶えて居らなくなり機関銃そうさに困るからと君は本隊に帰る事になりました。同年四月一日に自分が本部への連絡の為本部へ行って君に遭ひました。其の時は君は栄養失調のためカッケをおこして足が大変太くなっては居りましたがまだまだ元気でした。「どうだい君」、「ヤア原田君か」と防空壕の中より返事があった。「大分具合が悪い様だね」と云へば「なーに、みんなが栄養失調なもの」と元気だけはよかったが体の方は随分悪い様でした。私が島から持って来たタコの実と云ふ食べ物を全部と云ってもニツより持ってみなかったがそれを出すと、原田君の食べ物を取っては悪いと云って受け取らない。自分は島に行けばまだあるからと云へば、すまんすまんと云ひ乍ら、よろこんでおいしそうに食べました。原田君は元気でいいなー、君は必ず内地へ帰れるよ、おれは毎日日記をつけて居る、おれが死んだなら此の手帖を君の手で必ずおれの妻のシヅエに渡してくれ、いいか頼むと云われました。自分は、おい佐藤君、後二三月すれば必ず日本が勝つよ、そうすれば内地へ帰れるんだ弱いことを云ふな、いいかがんばれとはげまし、しばし語り合った事もありました。

昭和廿年四月廿六日朝早く本部へ連絡に行きました。中隊長が私の顔を見て大きな声で原田君おそかったよ、佐藤がな、お前に逢ひたがって、原田、々と云ひつづけて今朝四時に死んでしまった、と云われた時、私の心は到底筆舌に尽くす事は出来ません。あ、只った一人丈生き残ってゐた戦友佐藤君、君は到々死んでしまったのか、自分は用事を伝えるのも忘れて思ひにしずんでいみると、今佐藤君を埋めるんだ早く行ってよく顔を見ておけ、と云われてハッと我にかへり、あわててとんで行きました。大勢栄養失調患者が集まって佐藤君の死体をアナに埋める時だった。間に合った間に合ったと思ひ乍ら顔の布を取って見ると実に気高い顔をして何の苦しみも無くて死なれた様でした。思わず手を合わせて、佐藤君と云った丈、後は何も云ふ事は出来ませんでした。

思へば、生前元気で語り合ったのに今は永遠にかへらぬ人となった佐藤君、ねがわくば君の家族の行く末幸福を草葉の蔭より守ってやってください、頼むと心の中でくりかへし涙を呑んで土をかぶせねんごろにうずめてやりました。其の時の私の顔を見た若い兵隊が防空壕よりニツの手帖を持って来て、之は佐藤様が生前原田様に遭ったら此の手帖を頼んでくれと云われましたと私に其の手帖を渡されました。私が万一内地へ帰ったなら必ずお渡し致しますと今一度手を合せ其の場を去りました。以上の文面には少しのいつわりも御ざいませぬ。どうぞ故佐藤君の御霊を心ゆくまで御供養なされて下さる様、遠く山梨の地よりお願ひ申ます。遺品の手帖は別便にてお送り致しました故お受取り下さい。

先づは大略ではありますが右の通りで御ざいます。

追伸

私は終戦直後矢張り栄養失調のため病院船にて一番先に帰還いたしました。帰還後暫らくの間病院に居りましたが一日も早く家に帰りたくて十分全快まで待ち切れず退院致し家にて静養致しました。佐藤君の遺品もすぐおとどけ致すべきでありましたが、あまり早くお知らせ致しては、もしや帰って来るのぢやないかとお待ちになって居られるかも知れないのがっかりさせてはお気の毒と思って今日迄お知らせしなかった事をくれぐれもお詫び致します。又先日のお手紙もすぐ受取りましたが丁度仕事が忙がしくて後れました事をお詫び致します。何卒お許の程を。

(注) 原田氏の手紙にあるように、富五郎氏の手帳と日記のノートは、富五郎氏の死去の日に、偶然、原田氏が任務にあったアクメジ (Akmej) 島から本部のあるウォッチェ島に用務で行き埋葬に出会わなければ、原田氏の手には渡らず、また原田氏が生還しなければ、遺族の手にも届かなかつた。

佐藤富五郎戦場日記

昭和19年8月1日～昭和20年4月25日（絶筆）。翌26日午前4時死去。
全43ページ。

ノートは、途中のページから「日記」と題して、日付とともに日記がある。ほとんどの部分が鉛筆で、ごく小さな文字で記されている。記録用の手帳やノートは持ち歩くには小さく薄いものでなければならず、それゆえに貴重な用紙に大事に記録するために、極小の文字で書いたものと思われる。

手帳の遺書では夫人あてに「アトノ日記ハ、オ前ガ見テワカラナイ。僕ダケノ記憶ニ書タノダ」とある。

読み取りにくい文字が多く、推測で読み書き起こしたため、誤読も少なくないだろう。

日記原文はすべて漢字（旧字体）とカタカナの縦書きであるが、ここでは漢字（新字体）とひらがなに書き改めた。

「日記」が最初に書かれているページを、日記の「P.1」として順次ページ番号をふった。

●日記最初のページ（P1.）。冒頭に「日記」とある。昭和19年8月1日～7日。

以下、日付は区別しやすいようにゴシック体にした。不明の文字は、字数分「×」で表記。当て字は< >内に正しい文字（ポイント数を落とした）を入れておく。推測した文字ではあるが、理解できない、または疑問がある部分には（?）を付した。

とくに、この最初のページとそれに続く数ページは、文字がかすれていて、読み取りにくい。

日記

八月一日。 昨年の今日ウオッチェ入港××

暑い日ではあったが思出多き芽出度い日

××すべき日である。然るに本年一月三十日より

××缶詰状態にされ、減食に減食×××××

××××栄養不××足が「むくんで」××

××苦しいが××××××

××為×にあらず。自分で自分を××××

××って居る。子供達は八月一日で休暇であら

うと思ふと郷里の事××思ひ出してならず。

八月三日。 昨晩は良い月で南×月とも云ふべきだ。

×××一晩中夜官<間>爆撃有り。

××××身体が疲労××××

××××××××××××××××

××××して休養だ。パパイヤの葉で煙草を

製作して吸ふ。 **八月七日。**

×一八時当直××××××××××××

××××目が痛くて涙が出ず。

××甚だし。止むなく午前三時××の時×

××× 洗淨して××

×××以前<依然>として目痛×××

×前×空爆有り

(注) ウオッチェ入港が昭和18年8月1日だったことがわかる。戦友原田氏から遺族あての手紙では、18年11月から空爆が始まり、18日には毎日のように空襲があったと書かれている。19年1月30日から、米軍の航空機による爆撃が本格的に開始され、クエゼリン環礁の島々の守備隊は玉砕、現在はそれから5カ月経過。空爆を連日受け続けている。食糧事情は

悪化、富五郎氏は栄養不良になり、すでにこの時点で脚気を起こしている。「疲労」は日記ではつねに書かれている症状である。食糧も不足したままに教練や作業が行われていれば、当然の結果である。この日から死去まで9カ月と20日。

● P2. 昭和19年8月7～9日

××は止ず。時に珍しく大スコールであった。
本年は穴倉生活致×患れてスコールも少
であった点に全員助る次第なり。
七月下旬より時々スコールあるも夜のみなり。
全く珍しい。今月は目の痛も頑満<我慢>して
「スベリ草」苗を見付けたので自分の畝に
×して其の一部に植え付けを行ふ。併し苗たるや少
であった。其の苗も昨日当り誰かが忘れて行
つたであろう。今日、目の痛みにも之たけを記した。
八月八日。家族手当の申請を行せらる。午前目痛き
××より若狭兵曹のロート目薬をさしたら大分
良くなりたり。 **八月九日。**朝、病室にて目を洗ふ。
目にて一日休みたり。今朝二時からの当直
相変わらず行ふ。午前「マクワ」瓜の種を黒澤上水
より貰ひ、下肥等も施し、スベ×
も植付け、午後の海に行き「リフ」かつぎ大して収穫
なし。班長も足を×し、若狭兵曹も暫く休。
昨日シツ(?)の修理、×のふんどし作りを行へ共も目が痛く、
桜井兵長より足袋の底ゴム等貰って来た(腐コブラ)
八月十日。種々なる草食を行へ共も、昨夜の赤草食

(注) この後も、「赤草」ということばが頻繁に出てくる。食用にしていたもの。草食は、この後の記述にもある。「上水」は上等水兵の意か?

仁平義明

また、「リフ」は「リーフ (reef) 岩礁」の意か？不明。「“リフ” かつぎ」の意味も不明。

● P3. 昭和19年8月10～15日

の勢くせい>か腹痛下痢等有ったため、××有る

朝の二時四十五分起床の訓練には全く骨が

折れた。亦た××一水、田辺遂に病と聞く。

全く×した病死であった。僕も其の様有り

たかないと思った。昨夜は夢見も悪かった。

八月十五日。十五日目（ビスケ）二枚位の配給有り。

椰子の配給一ケ有りたり。昼夜の別なく爆撃

×前より××のため（カニ）取りに行かず。××

××当分草食で有った。朝の教練はきつい。

午前の作業一時間くらい有りたり又は休養。

今日は小隊農園作業に出た、虫取りであった。虫×

ウォッチエ中××海に面した方は××全滅の

××××××××××仲々×××××

××僕の所に来れたがお湯の出し兼ねた×

××であった腹が空いて目廻がする。

昨夜は歯が痛んで泣かされた。今日××××

×し亦発熱の様だ。午前洗濯×行った。

同年兵二名（原田・桜井）共も体悪く休んで居る。

今月十八日 四日目で椰子の配給一ケ有り。食事×混

入して食す。十一時××当直。午前大××方にて

（注）周囲の病死者についての記述。爆撃のために海岸に食糧補給に行けないときには食事は草食。昭和19年8月15日（終戦1年前）、ビスケット2枚だけ配給はある。この状況でも教練と農園作業。めまいのするような空腹感、歯痛や発熱があった。

● P4～5.

この見開き 2 ページは、変色とかすれのため判読できない。

● P6. 昭和19年 9月15日～16日

九月十五日。十五日間の任務もつつがなく

離島より本島に徒歩にて約二時間以上

大分前日の疲れ疲労す。来て見れば空

××あった。分隊員の土産物として

何もない。コプラ位のものであった。

九月十六日。空襲あり。大分本島でも被害

大の見込みなり。僕は本日前日の疲労とで

全く体が痛めり。二十日ぶりにてヒゲソリ等

戦地で何んともいへない平和の気分である。

何処で戦争して居かの感有り。

本日の作業分了へて本島に帰りなば、その

様に良く命に従って国の為に尽

すは本分だ。大いに努力仕様くしよう。九月から減食なり。

本隊に帰って見ても矢張り減食だ。驚かざるも得

ない。よく生て居るのは不思議な位いだ。飯わん中に

草や木の葉だけあるのみ。米が見えない。

離島作業中トレツ島約二時間歩いたが

不幸にして何の収かくもなし。労<疲>れ損。朝

×××夜帰った。りくつたいの道も×

困難であった。又、腰までこぎ歩きもせり。

二度と行く所にあらず。

(注)「コプラ」は、ヤシの胚乳を乾燥したもの。脂肪分が多く石鹸やマー

仁 平 義 明

ガリンなどの原料にもなるが、食料にもなる。守備隊員は、同じ環礁の離島に食糧探しに行っている。ウォッチェ環礁はサンゴ礁なので、ウォッチェ本島から一部の離島には徒歩で行けたようである。

● P7. 昭和19年9月16～17日

暫く振りにドラム缶入浴だ。而し入浴×××
気持ちが良いものだ。亦、本日本部作業だ。××が
嫌がったらしい。腰も痛む。又四時になると
暗くなる。十五日前は明るかった××××
××大分日が短くなった事は事実だ。

九月十七日。昨日と同じ七、八十機より成(る)小型変
タイ<編隊>空襲あり。片山君も直撃昨日有り。×無事
でありたり。本日作業帰りに見舞いに行く。
午後三時十五分本部に於て×××行ふ。黄海々戦。

九月十八日。例によって三時十五分前起床。明るい××
終つて爆弾穴うめ。心身綿の如し。何のたとひ×××
朝食後×崎×カニ^{ひらい}拾。暑い日であった。明日××

九月二十日。五日間大空襲有。病舎より松山通×××
被害じん大なり。南崎海に行く。午前中。

九月二十二日。三時十五分前起床。墓の掃を行ひ後
昨日の労<疲>れも×いなく南崎。足が重苦しくて歩
けない。顔もむくむ。身体の具合悪化す。食物は
三度の重湯以外に何もなし。木の葉草の葉あるトウトン×見張員として
午後三時頃出発、十月九日頃約十五日×××
の予定なり。本日、小型、大型の空爆有り。
僕は××午後、袋縫等行ふ。

(注) 空爆開始からすでに8カ月が経過。連日の空爆を受けている。その間も、ドラム缶入浴などもが、まだ行われていた。ただし、食糧事情は悪

化、三度の重湯と木の葉、草の葉のみになっている。疲労感、歩行の困難の記述。それでも環礁中の離島での見張り任務はある。

● P8. 昭和19年9月25日～30日

九月二十五日。×××草取に行く。途中水警に

立寄りコブラ等戴き分隊員一同にて食す。

最近は以前<依然>として暑く、スコール全く無し（水不足）。

九月二十七日。又もや中型機来襲、七機。小型二十機。

実に不気味を呈せり。今日も畠作り（たびぬい）等

行ふ。髪油虫取りも行ふ。スコール全くなし。班長は????

九月二十九日。不思議に九の字がつく。三十九年三十九才。

昭和十九年九月二十九日とは。本年の悪日は之れで

了ったかな。本日早朝午前六時空爆有り。又傷×

員×と共に本部に行って陣地の材料集を行ふ。

小隊長つききりまるで地ごくの様であった。減食はいぜん

として実施中の今日全くふらふらであった。

又明日も有るかな。僕は八～十一時間××当直。

九月三十日。午前八時過ぎ小型二十機よりなる

爆撃あり。遂に佐藤兵長三十九年生の三十九？

九月三十日に戦死せり。場所水警待機場

（×発）シンカンあと型もなし。彼も自分

のぼうくうごうにて、胸、首二弾片を

受け（そく死）す。彼の立派な最後の戦を

とげたり。悪い年三十九才、十九年

九月であった。僕は早速参拝す。

×××ウォッチエの土に彼はうずむ

（注）手帳に書かれた昭和20年4月20日付の遺書では、爆死したのは同郷の佐藤新造氏。飲料水は、スコールなど雨水を使用していたことがわかる。

● P9. 昭和19年10月1日

十月一日。当直五～八時。朝食前本隊農園
作業開始に参加。前にも行へ共も×爆
×にて全部皆<壊>滅に期<帰>す。第二回目開始す
二百坪を開根<墾>して、コーリヤンを植付との事
本部作業二時三十分より三時三十分
迄。馬場一水オリメージ×××出発す。
十月二日(?)。××××衰弱す。南×まで××××
××歩た。珍しく雨のため何の収穫もなし。帰れり。
本島で農園作業本腰なれど僕等××
×も全く動けない有様に弱った。輸送潜水かん
も入り様もなし。各分隊にも(手配簿より六人来る)
兵隊の分配有り。××高見沢兵曹××××
×××なり。今日のおじや又(ネズミが入った)
味の良い事は日本一。毎日新しい事が続て居
た。食後(二時×分)本部農園作業。主計長××
よりコブラー個づつ特に配給あり。食料は日一日と困難
なり。各自南瓜五本唐モロコシ十本と小隊農園
南瓜五百本唐モロコシ十本、コウラヤシじゃっかん
栽培の配当あり。 十月三日 小隊長訓示
司令通達。先ず箇条書にして見様<みよう>

(注)「味の良い事は日本一」というのは皮肉として書いているか。最期の近い昭和20年4月15日のページには「まずい料理日本一」という表現が出てくる。死の10日前でも余裕を持った人物である。この時期は食糧自給のために農園を開墾して、カボチャ、トウモロコシ等を植えていた。

● P10. 昭和19年10月3日～6日

一、本島三千五百人は既に二千七百名減す。
一、食料は四月迄であったが、伸して十二月半迄。
一、後は無くなり、がしく餓死するので為に農園作業開始。
一、主として、コウラヤン、カボチャ、トウモロコシ。
一、思様、食事して居ない体ではあるが全力を儘し
が死せず本分を儘ことである。それが為不平不満
のもの銃殺。見込なき病人も自けつ<決>。
一、ぬす人<盗人>も銃殺。其他悪行意<為>は厳罪にす。
一、作業一日中に同じそれが為め病弊るも其
犠せい<犠牲>は止むを得ないとのこと。(×××戒)は之を
あやしいと見れば発砲なすこと等。 僕は二十四粒の
カボチャの種×××貫ひ、床の作ってある所に
早速午前中播種す。時は十月三日午前中。

十月六日 (いたし)。×全島夕食後出発の様だ。一ヶ月
僕も彼もうらやましい感じだ。午前中南瓜播
種を行ふ。之で了り。次に(コーラヤン)の芽が出た。
早いものだが肥料がない。午前(どて開根<壟>)
を行った。食後は東部農園とやら。暇なし。
五日ぶりで小型の空爆あり。南方。

(注)「司令通達」には、食料の乏しさの記述と、「不平不満の者銃殺」「見込みのない病人は自決」「盗人も銃殺」という苛酷な指示が含まれている。集団が極度のストレス状況にあり、外部に攻撃を向けるのが困難なときには、ときとして圧力は集団内部に向かい、集団を維持しようとする。戦時の軍隊、オウム真理教、赤軍派等の内部リンチ然り。昭和19年10月時点で、すでにウォッチェ環礁では、軍の食料事情は限界状況に達し、たとえ兵が病で倒れても開墾作業を強要する状況にあったことがわかる。日

仁平義明

記にある通達では、3,500名いた本島守備兵は2,700名死亡し、すでに800名になった。

● P11. 昭和19年10月7日～11日

十月七日。午前（タイド）開根<壘>を行ひ、八～十一時××分後××書き等行ふ。夕食後又作業だ。

十月八日。日中外で究×当直××分隊

農園の当直となす。本日×命午前午後タイド

開根<壘>を行ひコウラヤン播種す。身体全く疲労す

十月九日。午前六時空襲、本日案外早かった

ビンボー暇なし。身体は満足に食ず為にと疲労

とで全く綿の如し。若狭兵曹トウトンより帰る、午後

十月十日。午^ひる、若狭兵曹帰祝コブラで腹をふくらす
大した今時としては何より御馳走様であった。何んと×

様無し。又今日から一部日課が変る。起床後

三時五十分迄教練、後農園。敵上陸算大なり

と司令訓示有り。何とした事だ。亦パラオの離島

にも敵前上陸ありと以前知らせられた。其れは

何んと大飛行場が有るときく。そして「パラオ」は

空爆と砲撃されて居るときく。敵はおそらく「ランイン」

を根きよ（根拠）として、戦場は日本海で行ふとの豫（よ）かんである。マアシャルは敵の手中に有るときく。

十月十一日。昨夜珍しく小量でありしがスコールあり

哨戒機は一夜中飛廻って居る(敵) (注：○で囲んである)

午前午後小隊農園作業、二分隊渡邊

上水にシャジニ本作って貰ふ。了。感謝す。

(注)「トウトン」は環礁中の Totoon 島。10月10日は、司令訓示で、厳しい情勢がもたらされている。「ランイン」は「蘭印」、「オランダ領東イ

ンド」。スマトラ島、ジャワ島、セレベス島、ボルネオ島南東部、ニューギニア島西半分。

● P12. 昭和19年10月16日～20日

十月十六日。戦果が発表された。

空母二十三隻、計艦船五十三隻と

あり。何れも台湾方面の戦果らしい。

高見沢兵曹、分隊下士として来れた。

阿部班長は前任下士官となられた。然し分隊下士

は病氣中休業であった。食事も今日より行った

小隊の農園は大たい済んだが本日より陣地作り

を予定なり。僕は稀に見る（えぼじ）で困って居る。

十月八日（注：十八日の誤り）。昨日より陣地作り、六～七・三〇、午后二・三〇××

但し外海陣地見るもあはれな陣地となって

居る。次に大戦果ありたりとの事、母艦

十隻以上撃沈、台湾方面での事。仕事の

間には農園作業。二・小隊農園より南瓜

一ヶ（ぬすまれ）日中も当直（に）立つ様になった。

十月十九日。日でり続行中であるも、本日十時

頃より珍しくスコールあり。前任下士若狭兵曹

前にてナマコ取（昼休中）本日朝四番

桜井兵長にコブラ御馳走になる。何よりであった。

僕と原田同年であった。夕食カボチャ飯。何より。

十月二十日。早朝（五時）敵小型機空爆あり。僕は本部

作業員、外海陣地小隊作業員を以て

作業に罹れり。朝食トカゲ食ふ。

（注）「戦果」の発表では、過大なあるいは全く偽りのものが伝えられて

仁 平 義 明

いると思われる。島内の食料事情はきびしく、栽培している南瓜の盗みが発生したりしている。「朝食、トカゲ食う」と書かれている。コブラ、ナマコ取り、カボチャ飯等、食料についての記述あり。10月19日の記述に、この日記をご家族に送られた「原田氏」は桜井兵長とともに同年兵だとあ

● P13. 昭和19年10月22日～23日

十月二十二日。昨夜は珍しくスコールあり。作物には絶好のシーズ（ン）であった、空襲なし。前戦（線）に行ったらしい。定期は来て居る。僕は作物肥料施せり。僕も脊<瘦>せて骨が折れて仕方なし。夜も死んだ様に（疲）労して寝る。本日昼に小隊のトウミギ一本配給ありしが最初だ。夕食後、沼宮内上水椰子取作業員として出発
二十七日帰りの予定なり。 **十月二十三日。**
総員起床後直（ただち）に発××前に於て第一中隊長の司令訓示通達あり。 一、七月十三日小隊通達（と）同じ事であった。 一、本島防備に当ってはもともと悪じょう件より見れば太平楽である。大いに××それを見れば頑張らなければならない。 一、本島を離れる者は天皇陛下を後に日本国土を出る様なもので甚だ遠感（遺憾）である。其の者と料食泥棒は今後死罪になる。 一、食物は十二日現在にて全く絶へる。×つてしんけん農園を行ひ休業×業と雖え共も、×くこと（草取等行ふ）又病床に有者に対し親切×になすこと。 一、警を了へ帰っ来れた者に対しても亦同じ。 一、行ってはいけないと言ふことをなさざる。 一、次の戦果、空母二、戦艦一、×艦

一、××艦一。場所フィリピンとミンダナオ

との間に於行った戦果なり。今朝発表。

(注) 兵の逃亡に対しては厳罰(死罪)の警告が出されている。食料も絶えた旨の厳しい状況も通達されている。戦果は偽りか。

● P14. 昭和19年10月25日～11月1日

十月二十五日。昨日の空爆小型二十四機であった。

今朝司令少将に進級遊ばされたと受給に。但し

下士官等には本年三月も辞令が来ない。

十一月になってもおそらく来ないだろう。可愛相だ。

僕の(ジ)も間もなくお陰で治療もなげずも全快だ。

だが食ったものはなし。身心綿の如だ。止むなく動いて居る。

夜に至り戦果大本営フィリピン方面に於て左の如くありたり。

空母六、戦艦一、巡洋艦三、輸送船(?)四、駆逐艦一。

十月二十六日。空爆小型、午後三時三十分至九・三〇。

××の空襲あり。丁度僕はメッチン行新さん橋に居り。

爆撃甚だし。遂に同時刻中止になる。(メッチンには)片山君居る筈だ。さぞ困であろう。小銃武装取調任務。

就床十時頃、全くきつかった。此の日又(フ)に戦果あり。

此の時×小队×ヤージであったが、僕と同じく取り止め。

二十六日出、二十九日帰る予定であった。行先(メッチン)

十月二十七日。五日間の椰子取作業も了て沼宮内も

夜の七時帰る。僕は三日間予定にてメッチン行予定。

十一月一日。午前二時四十五分頃、新栈橋着。会教

途中三名連行中一名主はん(犯)と見なす可き人

×海中身投げ自さつ(殺)を行ふ。時は午前一時過ぎ

橋本 伊藤 斉藤 三名 片山君にも会へた ×人

仁 平 義 明

(注) 十月二十五日のところに、(フ) とあるのは、おそらくフィリピンの略。「メッチン」はウォッチェ環礁内の「Mejjin」島。

● P15. 昭和19年11月1日～2日

出発は三十一日午後七時頃なりしも敵飛行機激しく亦、口島、トウトン島に立寄たる為め相当おそくなり、亦飛行機が三回に渡り舟の上空通過せり。全く月夜であった。敵は見つけないと見へる。先ずきもをつぶしたが任務も悉く了る。無事であったが帰る日、腸(腹)を起し、どうやら舟に乗れたが亦痛み、新田兵曹に話して遂に××に雨衣まくらに寝て来た。帰って一日、二日と又少々痛むので休んで居った。身心疲労中(昼)官<間>爆撃なし。夜官<間>のみ。戦果として相当有ったらしい結好(結構)なことだ。新船艦合せて二百十四隻と聞く。亦今日の発表は(レイテ湾)内に輸送船六十隻、巡洋艦三隻被害をなせ(る)と聞く。此の戦果に乗じて一日も早く我が軍のマアシャル進出を望んで居る。

十一月二日。メッチェ滞在三日の予定でありしも一日延期して四<四日>であったが(かんごくの)かんし<看守>の様なやく目であった。此の島に×六、七十名のしせつ部の軍夫が住で居る片×であった。

(注) 下痢、腹痛の症状が著しい。この時期、現地の住民がなんらかの理由で拘束されていたらしい記述がある。

● P16. 昭和19年11月3日～5日

十一月三日。朝、選拜式有、午前三時十五分司令×舎前司令講話有。了って休業とは実に珍し。スクール有り。昔、鎌倉時代支那元寇が九州上陸せんとするに国内、一大事有り。時の北條シッケン（執権）九州の兵を上げて之に当り時あたかも七月末（旧）二百十日頃神風ありて之を打平げたり。昔と異なり今は風位には平げることあたはず。自ら日本では神風を作ってそしきしたのは神風特別攻撃隊あり。其れには敷島、大和、朝日、菊水隊の五種あり。其の内の一部朝日隊は十月三十一日攻撃に出でて空母三隻其の他を撃沈せりとあり。此の時同司令長官攻撃隊の訓示には「お前達には戦果を知らせる事は出来ないのは残念であるが」而し英レイ<暁>に報告後、ご報告になすとの事であった。又、ラジオにて戦果知らせる。戦若しくは巡（洋）艦一隻撃沈、戦艦三隻大破、航空一。**十一月四日。**サイバン我が空襲大爆ありと、うれしいニ（ユ）ースを耳にす。此の日午後四時発、トウトンに行く。帰りは何んと雨に打たれ朝帰り五日休業す。目的前日であった<出会った>危（？）人を連行に行く。**十一月五日。**空爆十八機来る。最近雨料<量>多し。

（注）レイテ沖海戦での神風特別攻撃隊についての記述あり。

● P17. 昭和19年11月7日～11日

十一月七日。××××外海より艦船夜間射撃あるも三、四十分間にて了。被害×××××昼××爆撃にて井上兵曹外一名の戦死あり。**十一月九日。**朝昼食のみに×て、又も減食、身心共に

綿の如し。気の毒な倉島兵長（栄養失調）すっかり朝から弱って昼には全く弱音を吐く様になった。かんせつに米国のやつらにやられた様なものだ。早く輸送が付けば此の様な病も多数助かるが。今日から少々おじやにマグモツク混入らしい。僕は昨日マグモツク作業。

十一月十一日。小型早朝空爆あり。被害戦死者十名、負傷者多数あり。**十一月十二日。**午前分隊のトウミギ播種完了。450粒。（昨日アジひろい三×）×今日×隊連中のみ、我等はだめなり。

十一月十三日。本部作業帰って来て見れば隣分隊古川上水戦士<戦死>病名栄養失調との事。本日で三人目昼、休や先任下士より（コウロギ）御馳走になる。内の分隊倉島と食。普通なるも床に付て居る僕も全く疲労せり。

十一月十六日。午前四時三十分出発予定。離島管理。十五日倉島病死。午前八時頃、僕は穴掘等行ふ。十六日午前八時頃、エメージ着、小隊長に会ひ

（注）戦死、病死の記述が増えてきている。海藻の一種「モツク」を取って食べていたようである。

●紙幅の制限のため、昭和19年11月16日～昭和20年2月27日付日記は割愛する。

● P34. 昭和20年2月27日～3月3日

二月二十七日。×××僕は××菜摘み、トウミギ畑耕作。キノコ取り大れう。別科畑×備残大名であった。ヤシーケ。
二十八日。送別会、林兵曹、夕食後午前×ヤシ取り、キノコ取り。タコ十ヶ。ヤシニヶ。夜休であった。愉快な一日であった。
三月一日。僕が帰れの命来る。死のせんこくの様なものだと思ふ。

どうせ一度は死ぬんだ。本島では一日平均二十五、六名死んで行くと聞く。僕も其の一名かな。朝食後、林兵曹出でられた。僕より一日早い。昨夜は×××食。南瓜入れであった。暫くぶりでおいしかった。あれが今考える時、僕の送別も兼ね事だろう。もう本島に行っては飯も米も食べられない。

三月二日。途中疲労して五回休んでウォッチェ分隊に落付いた。

既に十二時過ぎ、一時半食事×長甲板士官用済ませ休む。エネヤ指揮官より贈、手拭一、沓下二、挽て来た生椰子一ケ。此の度一度の小便もなく、×朝の三時まで一寝り何んと限り無き疲労であった。もう此の上は暇有る限り農園をやって作物をして食善に×以外何のものもないと思った。

三月三日。疲労足かきずくきかず午前休み、午后より働き初め。三番四番合併ていぶる(?)。五名、沼宮内、成田、木葉取り離島に向った。正月中より来なかった爆撃機、三月一、二日と来。

(注)「タコ」はタコノキの実。富五郎氏は、昭和19年12月17日に同じウォッチェ環礁の「エネヤ島」(Enea エニア島)勤務になっていたが、本島ではない離島では、貧しくはあるがそれなりの食料に恵まれる日もあったらしい。昭和20年3月1日、ウォッチェ本島への帰還命令が下った。エニア島の食料事情は本島よりましだったようで、食料のない本島勤務にもどることは、餓死につながった。

● P35. 昭和20年3月4日～3月9日

ウォッチェ午後三時半、凌ぎよい風が吹いて来る間もなく夜戦に備へ三時四十分だ。スコール全くなし。すずしい風だ。人殺しウォッチェにも見えない。陽気に罪はない。やさしいものだ。高見沢、若狭、渡辺も死んだ。残るは二名と僕だ。

三月四日晴。爆撃あり。覚悟して来た。僕もとうとう顔はむくみ

足も同じ。何んと苦痛。例様もなし。午前中、虫取り草りはだし。
午後はたおれた。お昼持二（コウラン、カボチャあり、糧食倉××。本日
より当直あり。

日曜、軍歌あり。足は増々もくみくむくむ一方なり。

三月五日。昨日、僕ノ誕生日であった。昨日から急に体が弱った。本日に至ってもう夕刻は歩けない程足がむくむなり。人生ももう之れ迄。今まで良く御蔭で頑張り抜いた。気はしっかりして居るが足さかず、もう死の一步前と思ふ。

日誌記入も暫く書けない。休む。遺書も××に、別封記入する。昨夜当直、料食倉番二人でありしも、徳江が起こさず最初にて時三十分も切った。哨兵長、兵には申訳なかったが止むを得ない。

三月八日、九日。晴。料食倉番当直なるも身体は冷×足のおくみ甚し。歩けない。足を引摺り当直。足がしびれ来た。ひざ上、も、までおくみ致方なし。もう既に働けない。おくみ^{はなはだ}甚し。

(注) 三月は最期の月。三月三日には、珍しくおだやかな気象についての記述(“やさしいものだ”)が残されている。三月四日。顔や足はむくみ、歩行は困難。生への思いを絶ち、死の覚悟に入る。五日、遺書(手帳の遺書とは異なる。内容は不明)も書かれ封筒に入れられている。それでも当直がじゅうぶんできなかったことを思う、責任感の強さがみられる。三月四日の「軍歌あり」という記述からは、兵士たちの戦意を維持するために、隊で軍歌を歌わせたことが推測される。

● P36. 昭和20年3月10日～3月13日

三月十日。 晴。

三月十一日。 曇り 日曜。モロコシ鉄かぶと中にて昨日より××

去る八日より分隊下士として□□二曹来る。千葉同じく一砲より。
僕歩く全く困難なる為め××当直す。原<現>場まで実に
二十五分を要す。今少々気分も良い方なり。午前十時より晴天となる。

三月十二日。雨。珍しくスコール有り。当直八～十時。

重い足を引摺り乍ら務めた。帰って床に付く。ふんどし
ぼろぼろ。金玉かゆくなる。薬を付けてふんどし換
ものの晴<腫>れものは少しも引かず、心配でならず。
椰子の配給が有ったが先ず申すまい。

三月十三日。小雨。診察を得た。今は自分の足の様にあらず。ゾーリ一足作る。

午後、休業す。 **十七日** 千葉、離島より帰り、十七日畑の
方をやって貰う。魚一匹御馳走になる。僕はむくんだ足を引摺り乍ら南崎
まで、やし取りを行う。足増々むくむに至る。十七日ぶりにて入浴す。金玉まで
晴<腫>れて居った。隊に居れば寝てばかり居ると云れる。全く弱き身
体は残念でならず。も一度達者になって見たいものだよ。××××

(注) もう一度回復したいという願いはあった。

● P37. 昭和20年3月19日～3月23日

三月十九日晴。午九時二十分頃、千葉魚採りに出かけた後、僕が草取りを
して昼寝中、南瓜をうでで、うらむべき前任下士、□□とが丸うでカボチ
ャを分配中であつた。何として×心であらう。僕が体
が丈夫であつたならとつくづく思はざるを得ない。
彼等の悪行意<為>、話には聞いて居つたが、まさかと
思つて居つた。僕だけでも二回も見て居る。
若狭、高見沢、松村も良く斯の如き悪行意
を認めて僕に訴える事があつた。今考えると実
際の事であつた事が判る。死んで行くものは
哀れなり。(三月十九日の出来事なり) 僕が

右記便所に行く途に於て発見せるものなり。

十二～二（時？）当直。 **三月二十一日**晴。千葉小魚少々採り来る。
夕食は御馳走になる。元気付く。其の時よりトウミギせんじて飲め共も
先任は次第に良くなり、僕は増々晴<腫>れ上がり歩くこと全く困難となる。
ヒザの上、モ、驚く可き晴<腫>れて来た。トウミギのせんじが悪かった
かと思われる。も早や自命も之迄かな。先任下カイゼン
島行き of 身体検査に行き 僕は止むなく床に付く
エネヤ島より帰って来た僕が見た目じや死にそうもなかったものが
成田も死んで行、午前十時頃まいそうを行った。斯して兵は死に行く。

二十三日。先任下士、カイゼン島 保養に行かれる。

（注）食料事情が悪化し、食料を確保して弱っていない上官と飢餓で弱った兵という図式は哀しいかな、ここでは現実。若狭、高見沢氏らはすでに死亡。「□□」の部分には固有名詞が書かれていたが、ここでは伏せる。一方、同年兵の千葉氏のようにわずかに得られ小魚をほかの者に度々分け与える兵士もいた。富五郎氏に親切なふるまいをした人間が、ほかにも原田氏など何人かいたことが書かれており、しばしば感謝を述べている。

● P38. 昭和20年3月29日～4月9日

三月二十九日晴、千葉当直、沼宮内診察。僕朝食用意

やっとの事であった。二十四日頃より当直休ま

せて貰って居るが増々病気で歩けなくなる一方、今日は反対
の右足腫れる。腸も足も大分苦しくなってきた。顔のおぐみ
も甚だし。但し両方のうで全く細くなって仕舞った。

××当直中、千葉盗ぞくをとらへり。而し彼も

銃撃さるも一命を取り止めた。亦の日千葉×アジ取り来り初

物として御配×になる。 **三十日**。床に付く。千葉と僕。

××晴。沼宮内も床に付いて三、四日、枕を並べて××に仕まつ。

×いてるものは班長一人、気毒次第、原田×来る。××り親切であった。

手袋、沓下を各一差し上げた。椰子一ケ配給有り。うれしかった。八日、
××××と聞く。食料は六日迄あるそうだ。其の後何もなし。
僕の足は悪化す。今日四月八日、おしやか様だ、思い出す。
×が今×何の食ひものなし。哀れなり。死を待つあるのみ。

四月九日。 ××（悪×意見届くなり）

一、×断（カボチャ）三ケ取り 赤草混合喰盛り×

一、配食なべにかくしてあった

一、かんに入れて ゆでてあった（僕見るに見兼ね）

注意をうながした。（再三の悪行為）にくむ可き×

僕と沼宮内、床に付いて居て仕方なし。

（注）食料事情が極限に来ているため、床についている病人に配分されな
かったとみられる。4月8日は、釈迦の誕生を祝う灌仏会、花まつりの
日。故郷を思い出していた。

● P39. 昭和20年4月12日（死去2週間前）

分隊下士

■■上水 (悪)

四月十二日。 又もや中隊長殿の（え一魚）

配給あるも良い所やき魚にして二人

で処分す。僕等残念ならずも床に付いて

居るので仕方なし。せめて配給おあたり位

は同じく頂きたいも（の）だ。

いつもだしにされ魚と云ふ魚は喰せられず

之で魚のことも再三である。どうして僕

等二人はきらはれるであろう。病人なる故かな。

要するに（かくし喰いさる）致し方なし。

再三の事なれば日記に書くのを止め様。

早く丈夫になりたいが、斯くあればだめだ。

沼宮内も大く大分弱って来て居るが僕も歩けない。

配給の不平、分隊下士□□兵曹。

以上午前の出来事、沼宮内よりきいた。

四月十三日、雨なり。悪日だ。松本兵曹長、佐藤××分隊下士、

沼宮内、三人、七時頃で死んだ。昨夜、沼宮内××

十一時頃であった、雨の降るのに南瓜喰いたいとせがまれた。

私は一ケのものもなし。困った。到々喰わせず喰ずに死んで

行った。十二時頃は大きなこひく声で一人り事言して

朝方なくなった。どんなに喰ひたかったで（ある）う。

僕も彼の死とは知らなかった。うらむなよ

故沼宮内。僕の病気増（々）むくむ一方なり。足きかず。

（注）二人の名前（固有名詞）が書かれ、その下に丸で囲った~~悪~~の字がある。弱った病人には食料を与えず、上の軍人ほど食料を確保することがあった。富五郎氏は、自分に死がせまっているのにもかかわらず、亡くなった同年兵を思いやっている。「おあたり（食）」は別なところにも出てくるが意味は不明。

● P40. 昭和20年4月12日～15日

同日、中隊長報達、本日十二時ルーズベルト

原因不明なるも死せ（る）とありたり。（××）×

この**十三日**。夜、珍しく雷稲光有り。

スコール甚し。三枚着て寝て毛布二枚掛け

ても暑くなかった。最も体は悪化して来て居る

腹が膨れる。足手はむくみ何たる不幸

ぞや。早や死の一步手前。せめて応召記念

四月二十八日満ニヶ年、生きていたいと

拝んだ。又、妻子の写真も拝んだ。

四月十四日晴。身体余り具合悪オアタリ

食のみ。昼食絶食。之れで今月一ぱいも
たない。無念なり。又、何も食せずも下痢
もする。胃腸が弱って居る事だ。昨夕
艦砲射撃あるも被害なき模様なり。
日記も手がむくみ、杖もつけない有様故、
思様に筆採れない。偵察機××

十五日。待ちに待ちたる増食日なるも
至ってであった（カツカンコブ入れ）銀飯
少量。赤草入、南瓜の半じく入れ。
まずい料理日本一。汁なし。
内で作之は南瓜入れ。おいしい。

栗田兵曹料理。

（注）フランクリン・ルーズベルト大統領は、1945年4月12日死亡。死因は脳出血とされる。取り残された島でも、通信手段は残されていたのだろうか、この情報は正確である。4月13日には、「早や死の一步手前」「せめて応召記念、4月28日まで」生きたいと書かれている。妻子の写真も持っていて、それを拝んでいた。“今月一ぱいもたない”という予測は、正しかった。

● P41. 昭和20年4月16日～20日

四月十六日曇り。亘理のお祭<祭>り

病室裏、舟田来る。

オリメージ先の離島魚ろう<漁労>に行く。

今日出発。

魚送る約束で僕も、

沓下一、手拭一、沓下留一、

×石一、×古下一、ケシパス（？）小二、袋一、

風呂敷一、チリ紙一、患んでやった。

当てなるまい。

病状、十三日よりオアタリ食

のみ。腸がふくれ？喰へなし。

ナイフー ××××なり。

衣のうから禪下出し、やつのこと。

中はぬれて弁た。ほす元気なし。

物忘はする。生きれく息切れす。歩けない。

かなり足が痛む。もう長いことなし。

せめて今月一ぱい生きたいものだ。

四月十九日。十三日目であれしや椰子配一ヶ配給あり。

然しもう半分も食へない。草も食へない。オアタリのみ。

二十日。床についた。命も之れまで。後余す所

幾日もあるまい。ひざ全くきかない。

ノモ（シ）ハン、ガダルカナルよりつらかった事は実際

（注）故郷宮城県亘理町の多くの神社では、四月、他の地区と同様に、春祭がある。20日には、“後余す所、幾日もあるまい”と死期を悟っている。この日付で手帳に遺書が書かれた。このページから行当たり字数、行数が急に少なくなっている。富五郎氏も弱り、書字運動を微細にコントロールすることが困難になってきたため、文字が大きく書かれたと思われる。

● P42. 昭和20年4月20日～23日（死亡3日前）

×××××方面××戦にうつ×××

僕は×念ならず。

×××× 床の中では字も書けない。×

足が全く動けず、手×の如くなり。

今朝かと思った、明朝死ぬか生きるかの×

×××××かったやしも今日一ケまで食×

何時も一度で喰もので、之で×××

数日××りにて爆撃×××機来たり

腹全般はれて苦しくてならず。

草食×××になりしより××

××カボチャ、トウミギ食×××

になれず、床に付いてれば仕方なし。

××□□、■■等の×××

×やめて置ませう。×××

四月廿二日。一、二、三、四合併

食事三、四、一か所となる。

二十三日。アジニ匹、宮森にいただいた。

うれしくて涙が出そう。之が最初で

あり最後でせう。松岡兵長親切

だ。僕に×ニケいただいた。

助けの神もあるものだ。

××、川村にも世話になる。

(注) このページはかすれ、判読きわめて困難。富五郎氏は最期まで感謝の言が少なくない。

●最終43ページ。昭和20年4月24日～25日。

二十四日。××頃までスコール其の後晴。昨日遊に

来て××がって居た伊丹が今朝七時頃

×××た。若い者死まで約介<厄介>にもならず

歩けるものだね。僕は床付く儘、又動

けず、其の苦しみたや不自由やら

大したものだ。早く行きたいものと考へて居る。

四月二十四日夜一人ね。**二十五日**

非常に朝方苦しむなり 死かと思

ふ 神様の御蔭で助った

二十五日 全ク動ケズ苦シム

日記書ケナイ

之レガ遺書

昭和二十年四月

二十五日

最後カナ

(注) 最後の部分だけは、原文の通りカタカナで書き起こした。

「二十五日」からは乱れた大きな文字になり、「最後カナ」で終わっている。この部分は、原文のようにポイント数を大きくした。戦友原田氏の手紙によれば、佐藤富五郎氏は翌二十六日午前四時死去。

佐藤富五郎戦場日記にあらわれたもの：“良い死”をめぐって

がんなどの終末期医療では、患者の“良い死”をめぐり議論がある。治療の途中までの時期は、がん患者のQOL（Quality of Life：生の良質さ）が焦点になるが、次第に抗がん剤にも反応がみられなくなり、治療の選択肢がなくなってくると、焦点はQOD（Quality of Death：死の良質さ）の問題に移ってくる（村川、2007）。この段階では、限られた時間・限られた条件の中での死が、果たして“良い死”であったかどうか問われ始めるのである。

同じように、孤立した戦場でそれぞれの戦いを続けてきた兵士たちも、途中までは生への闘いを続けるものの、食料も途絶え、ある時点からは、自分の生の終わりを意識するようになる。佐藤富五郎氏も、またその一人である。彼は3月4日には、自分の身体の状態から死を覚悟した。

しかし、そもそも“良い死”とはどのような死かという問いの答には妥当性がない。死んだ者が、これは良い死だったと判断する外的基準になる答を返してはくれないからである。良い死という問いは、問い自体が解を

出せるようには明細化されておらず、単一解を求める条件が不備な不良設定問題であるといえる。がん患者の良い死も、立場によって大きく異なっている (Steinhauser et al., 2000 ; Murakawa & Nihei, 2009)。家族が考える良い死、さまざまな立場の医療者が考える良い死、そして死の間近な患者が想像する良い死の条件は、それぞれ大きく異なっている。それにもかかわらず、われわれは良い死とはどのような死であるかを、問わないではいられない (Aitini & Cetto, 2006)。

良い死の条件は、“受け入れ可能な死” (an acceptable death) のガイドラインを提案した Weisman (1972) 以来、さまざまな条件が挙げられてきた。たとえば、Mak & Klinton (1999) は、多くの研究者が挙げてきた良い死の条件はおよそ次の7つのものにまとめられるとしている。

- ① 快適さ：苦痛と苦悩から解放されていること。
- ② オープンネス：もはや死ぬことを意識していること。
- ③ 完了の感覚：自分の死のときがきたことを受け入れ、じゅうぶんに生き切ったと思えること。
- ④ コントロール：生の終わりを受容し、自分の人生には意味があったと信じ、最後の死のとき、死後の始末を自分で選ぶこと
- ⑤ 楽観：すなわち生きる望みを持ち続けること、生きている間の生を喜ぶこと、死に応戦すること。
- ⑥ 旅立ちへの準備：家族、友人、医療スタッフに別れを告げること、未完の仕事を終えること (和解、果たしていなかった望みを果たすこと)
- ⑦ 場所：自分がどこで最期を迎えるかの選択

多くの条件がすべて揃った“良い死”は、がん医療などの現場でもまず見あたらないだろう。

戦場の兵士にとって、こうした“良い死”の条件は望むべくもない。軍人の良い死は、たてまえ上は、富五郎氏の日記や遺書、原田氏の手紙にも出てくるように名誉の“戦死”である。しかし、それも、制海権・制空権

仁 平 義 明

を米軍に長期にわたって奪われ空爆を受け続けるだけで、戦う手段もなく、餓死を待つ兵士たちには得られなかった。

残されたわずかな条件のうち、富五郎氏の場合は、家族に別れを告げることだけが願いだっただ。彼は、自分の手帳や日記がもしかしたら原田氏の手にもわたることで、自分の最後のメッセージが家族に伝えられることを願った。それは、奇跡的に果たされた。

そして、60年以上を経て、佐藤富五郎一等兵曹が、彼の戦場でどう生き、どう死んでいったかが、このようなかたちで世に出ることになった。

大岡信「折々のうた」(朝日新聞。記憶によって書いているので、作者と年月日不詳)には、次の短歌が紹介されている。人生を世俗の成功のうちに全うしなくても、子は父をその生き方ゆえに愛し、その子に生まれたことを誇ることができる。

わが父は人に愛され世の中に敗れて死にき われはその子ぞ

遺書と戦場日記にあらわれたように、佐藤富五郎一等兵曹は、家族を愛し、几帳面な態度を崩さない誠実な人間のまま、最期の日まで困難な生をよく戦いぬいた。

その子は、父を誇るべきであり、そうしているはずである。

引用文献

- Aitini, E. & Cetto, G. L. (2006) A good death for cancer patients: Still a dream? *Annals of Oncology*, 17, 733-734.
- Mak, J. M. H., & Clinton, M. (1999) Promoting a good death: An agenda for outcome research—A reviews of the literature. *Nursing Ethics*, 6, 97-106.
- 村川康子 2007 「がん医療現場における告知と嘘」 仁平義明編『嘘の臨床・嘘の現場』 現代のエスプリ481、29-39.
- Murakawa, Y. & Nihei, Y. (2009) Understanding the concept of a 'good death' in Japan: Differences in the view of doctors, palliative and non-palliative ward

- nurses. *International Journal of Palliative Nursing*, 15, 282-289.
- Steinhauser, K. E., Christakis, N. A., Clipp, E. C., McNeilly, M., McIntyre, L., & Tulsky, J. (2000) Factors considered important at the end of life by patients, family, physicians, and other care providers. *JAMA*, 284, 2476-2482.
- Weisman, A. D. (1972) *On death and dying: A psychiatric study of terminality*. New York: Behavioral Publications.

(本学教育学部教授)